

《隠謀学》入門Ⅲ

～正義の戦争はあるか？

村 岡 潔

〔抄 録〕

本稿は、前回、前々回の隠謀学入門を受けて、人間のミクロ社会における不殺生の問題と、それをマクロの社会に展開した形で起こる戦争の問題を取り上げた。第1節では、不殺生と輪廻説の関係について述べ、不殺生が行われることの隠謀学的機転と考えた。第2節では、ベジタリアンと不殺生との関係を取り上げ、両者は決してパラレルではないことを論じた。

第3節と第4節では、正義の戦争あるいは人道的介入戦争は存在するのかという命題に対して、アヒンサーの思想と対比させながら、小田実が指摘するように、そうした戦争は存在しえないことと、戦争自体が敵なのだという結論を提示した。

キーワード：隠謀学、戦争、正義、不殺生戒、アヒンサー

メリーちゃんは塙の上
犬が怖かったから
犬もメリーがこわかった
いつも泣いてばかりいたから
(B・ブレヒトの詩)¹⁾

(1) はじめに～不殺生をめぐる

前回と前々回「隠謀学入門」で「隠謀学」については、さまざまな例をもとに、隠謀の性質と役割について紹介し、かつ、その見解をもとに隠謀を回避するための基本的な手法についても述べてきました²⁾。ここでいう「隠謀」とは、すなわち、「ある目的を達成するために秘密裏の計画を立てること」であり、その目的は「小説・演劇・映画などの物語を構成するような一連の出来事」、言い換えれば、「人生や生活上の様々な出来事」を計画者の利害関心に沿った

形で実現するためのアプローチを指しています。この視点に立つと、いうまでもなく「戦争」も隠謀学の対象となります。今回は、「戦争」と「正義」について隠謀学的な分析を試みます。ちなみに、隠謀学の手法は、自らの等身大に立って物事を観るということです。一見、複雑に見える事象も、小中学生のような単純な目（純粹とは言いませんが）で見るとだいたいのからくりが見えてしまうものです。隠謀学では、これを「裸の王様」原理と呼ぶことにしましょう。

仏の教えである十善戒のトップにあるのが不殺生戒ですが、これはモーセの十戒と通じています。しかし、昨今（ばかりかどうかわかりませんが）の未成年（ばかりとはかぎりませんが）の中には「人を殺してみたくなった」としてそれを実行してみたり、そこまでいなくても「どうして人間を殺してはいけないのか？」と問うて大人を返答に困らせたりすることが（メディアのおかげか）目立つようになりました。その背景には、他の生き物は殺して食べたりしているのにという人間社会の実態への単純な疑問があると思います。

教え（戒律）や法で殺人は禁じられているからいけないというのでは、質問者は納得しないでしょう。つぎの利己主義は究極的には損だという功利主義的な説明には、少しは納得してくれるかもしれません。米国の大学生向けの「倫理」のある教科書には、最初のほうで「利己的快樂主義 egoistic hedonism」の実践は、はじめは得するよう見えるが通算すると結局のところ高くつくといった解説がなされています³⁾。

私見では、たとえば、自分が店の売り上げを増やそうとして最初に値上げすると、周囲の店も便乗して値上げするという現象につながり、結局は、その値上げ分が店の仕入れなどの費用の値上げとなって自分に跳ね返ってくるといった筋書きです。快樂殺人も、同様で、犯行が明らかになると、犯人は、昔ならそのコミュニンでリンチにあっただろうし、あるいは法治国家であれば殺人罪で逮捕され死刑もしくは終身刑/無期懲役とされて命を失うか、塙の中に隔離され社会的生命を絶たれるかされるわけです。自分が損するから利己主義はいけないとするのは、徳とか人道 humanitarianism という見地からすると水準の低い議論に見えますが、後者より説得力は大きいように思えます。

古代インドで始まりいくつかの仏教宗派でも説く輪廻説（仏陀の教えではないと言われますが）にも、同様の「隠謀」が潜んでいることが見てとれます。この世で悪を働くと地獄に落ちるといった言説です。正確には、天道（快樂に満ちた天人の世界だが、後半生では老いて死ぬ苦しみ待つ）、人道（私たち人間の世界）、阿修羅道（怒りに満ちた魔の世界）、畜生道（家畜や他の動物の世界）、餓鬼道（常に飢えに苦しむ世界）、および地獄道（拷問にさいなまれる最悪の世界）の6つの世界を「六^{ろく}道」と言い、あらゆる生き物はこの苦の世界を転々と生まれ変わることになります。悟り enlightenment を開いて、この生の苦の循環（六道）から脱出することが仏教の目標である解脱 emancipation というわけです⁴⁾。

これは、いわば飴と鞭の原理であり、これも前述の利己的快樂主義の否定の論理と同じタイプと言えるでしょう。もっとも、選択肢（クラスター）が六道+解脱で7つありますので、単

純に飴と鞭の原理より複雑なので「輪廻原理」と呼ぶことにします。仏教者が精進（修行）するのは、身もふたもなく（有体に）言えば、解脱か天道に生まれ変わるか、それがだめでも、もとの人道には戻りたいという望みから平生、善行を行なうようにこの隠謀学的な輪廻原理が働いていることになります。

(2) ベジタリアンは不殺生か？

さて私見では、輪廻転生を支える仏教の前提は、「山川草木悉有仏性」や「山川草木悉皆成仏」という言明に象徴されるように、万物に仏性があるということです⁵⁾。仏性とは、周知のように仏になることができる性質ということです。もっともデジタル大辞林などでは、すべての生き物に仏性があるとして、山川などの無生物は除外されています。すべての生き物がこの六道循環に組み込まれているということになります。

整理しますと、西欧の不殺生は主に人間に対してだけですが、東洋など仏教の影響下の地域では、不殺生の中身は人間や動物だけにとどまらず、近代の生物学誕生以降は、理屈の上では、仏性をもつ植物（19世紀以降は、微生物も）もその対象となりうるのです。もっとも、仏教者は、この「すべての生き物」の中には、人間（人道の住人）とそれ以外の動物（畜生道のメンバー）は含めても、植物や微生物は含めていません⁶⁾。ただし、動物の中には昆虫も含まれるようです。たとえば、ネパールのカトマンズの街角のカフェで日本の若者がお茶を飲もうとしたときカップにハエが止まったので追い払おうとしたところ、隣にいた現地の老人から『それは君の「亡くなったおじいさん」かもしれないから、おやめなさい』とたしなめられたということです。ジャイナ教徒は、平生、徹底したアヒンサー（不殺生）を実践していると言われています。

このような輪廻原理から、台湾の慈済基金会に見られるように、仏教者にして菜食主義者は少なくないのです。一方、欧米では、動物愛護論者などが他の動物を不殺生の対象と考えてベジタリアンになっており、日本人のベジタリアンも欧米の影響による者が多いと思います。私見では、これは輪廻原理からではなく、人間と他の動物の一部が平等とみなす考えからくるものです。中には、反捕鯨運動に見られるように不殺生の対象が、人間やそれに近い知能を持つとする動物、あるいは家畜に限定して（昨今では絶滅危惧種という付加価値がついた動物を含める傾向もありますが）、それ以外の殺生可とする動物の間に格差を設けることで成立している政治的な場合もあります。いずれにしても、基本的に後者は、人道主義的なアプローチと言えます。ここでいう人道主義とは、輪廻の六道における人道の世界にしか通用しない価値観なのです。

たとえば、ナチス・ドイツの時代、A・ヒトラーは、ドイツ青年に心身の健康を保つように教示し、肉体は国家のものであり、清潔にして元気を保ち、野菜、果物をたくさん食べて、逆

に酒、タバコ、コーヒーなどの刺激物を禁止するように彼らを薫陶しました。ヒトラー自身も、身体健康維持のためベジタリアンでした。また、彼は、動物愛護主義者であり、軍事目的以外の動物実験を禁止し、動物の反生体解剖法と森林狩猟法を制定して狩猟の規制も行いました⁷⁾。ちなみに、倫理学者のP・シンガーも、ベジタリアンであり動物愛護運動の理論家で「動物の権利」を謳いながら、一方で、植物状態の人間の価値は成獣のサルよりも低いとするような分別を肯定し、その消極的安楽死（尊厳死）や胎児の人工妊娠中絶を容認する立場を表明しています⁸⁾。その見解の背景には、人間としての価値が人格（personhood）で決定されるとする大義があるようです。

この2例からは、ベジタリアンや動物愛護主義者は、必ずしも人命を第一とする人道主義者ではないとみなすことができます。むしろ人間の価値には格差（QOL＝生命の質の差）があり、その差によって人権・生存権の有無まで左右されかねないのです。また、不殺生戒は、近代栄養学とも拮抗します。たとえば、人間の食物として、最も効率的で食物残渣が少ないと言えるのは、言うのものはばかられますが「人肉」です。人間同士が一番、構成要素が豚や牛などの家畜より近いからです。これは食品科学的には正しいかもしれませんが、法にも倫理にもただちに抵触します。

人肉食は20世紀にも犯罪・戦争犯罪としては散見されます⁹⁾。それがやむなく許容されるのは、特に南米の山地における飛行機の墜落事故の生存者の場合のように、非常事態でそれしか生きるすべがないという場合だけでしょう。

いずれにしろ19世紀に奴隷制度が廃止された点は評価すべきであり、もし現在も存続しているならば、医療分野などの危険な人体実験には当人の同意もなく合法的に実験材料にされていたことでしょう（人気のプラセンタ製材ですが、豚などの家畜から作られる以外に、人からの抽出したプラセンタが使用されています¹⁰⁾。プラセンタとは胎盤のことなので、厳密に言えば、人肉食の一形態とみなすこともできるでしょう）。

もっとも、人肉食は、他の動物の場合、それが魚類でも爬虫類でも鳥類でも哺乳類でもあるいは昆虫類であっても、共食いとして見られる決して珍しくない現象です。この現象は、人間の目から見ればかなりおぞましいものですが、先述の非常事態のような状態が、他の動物の場合には日常的に存在する常態なのだと解釈の方が合理的です。昆虫界では、生んだ仔虫たちに食べられる母虫がいるかと思えば、交尾後に雌に食べられる雄がいます。非常に合理的に世界が展開しているわけです。欧米人が、「知能が高く」自分たちの先祖ではないかと考えていたチンパンジーが群れでコロギスのような小型のサルの狩りをして一種の共食いをしている事実が判明したときにショックを受けた研究者がいたそうです。が、これなども、そういう場から逃げ場も変わりようもない状態の中で構成メンバー同士が生きているのが畜生道の常態であることが理解されていない証左と言えましょう。一方、人類は、当初はそうであったかもしれませんが、文化文明の形成の中で不殺生やその一形態としての共食い禁止をルールにする

ことで他の動物とは異なる道を選んできたのだと思います。

ところで、ベジタリアンの大義にも問題はあります。その大義あるいは正義とは、凡そ生き物の命を奪いたくないので専ら植物（穀物）を食するというものでしょう。しかし、仏教の草木悉皆有仏性では草木も命のひとつですから、第一に、動物の生命は奪わない（あるいは動物の命を奪うことになる肉食をしない）としても、植物の命を奪っていることには変わりはないわけです。また第二に、医学生理学的に見ると、野菜や穀物を食してもそれが腸内細菌によって、いわば動物性のたんぱく等の栄養素に変換されて栄養源として吸収されているので結果的には肉食と同じことになってしまうわけです。たとえば狂牛病（クロイツフェルト・ヤコブ病）になった牛は、脳スポンジ症になったヒツジの脳味噌（動物性たんぱく質）を飼料として与えられそれを消化してしまった結果なわけです。

ですから隠謀学的に考えると、ベジタリアンの大義というものは大変もろいものであると言えます。それよりも、動物である人間は、植物と違って自分の体内で栄養を作ることができないこと、すなわち、私たち人間は、他の生き物を食べる＝他の生き物の命をいただくことで命を永らえるしかないと悟ることが肝要と考えるのです。仏教では、そうした命がめぐり合いながら生まれ変わりを展開するという輪廻原理で不殺生を謳っていることになります。

(3) 正義の戦争または人道的戦争はあるのか？

さて、いよいよ視点をミクロからマクロに拡大して大量殺人・大殺生としての戦争についてみていきます。特に、1999年のコソボにおける民族紛争での「民族浄化」阻止の名の下に「NATO」（北大西洋条約機構）軍がユーゴスラビアに対して行なった「空爆」が人道的介入という大義を掲げた戦争だからですし、近年では西アジア（欧米から見たら中東）地区のイスラム勢力にまつわる地域紛争でもそうした声が聞こえてくるような事態だからです。むろん、ここではそうした紛争の具体的問題の解析や対策を論ずるものではありませんが、正義や大義のない戦争はこれまでになかったという隠謀学的視点からのアナトミー（文化社会的解剖）です。

中華人民共和国の創立者の一人である毛澤東は「戦争は政治の継続である。……政治の途上の障害を一掃しようとして、戦争が勃発する。……障害が一掃され、政治の目的が達成されると、戦争は終結する」と述べ、また「歴史上の戦争は二つに分類できる。一つは正義の戦争であり、もう一つは不正義の戦争である。」と分類し、「戦争－人間が人間を虐殺するこの怪物を、人類社会の発展が、終局的には消滅させるにちがいない。……その方法はただ一つ、戦争によって戦争に反対」することだと述べています¹¹⁾。

この前半の「政治は戦争の継続」という部分は、クラウゼヴィッツの『戦争論』の第一章¹²⁾で詳しく展開されている部分を彷彿とさせる主張になっていますが、後半の「正義の戦争 vs

不正義の戦争」の部分、日本の侵略戦争にたいする抗日戦争という認識を超えた内容になっています。実際のその後の（特に昨今の）歴史を見れば、その目標とした「世界の戦争の消滅」に向かう流れとは程遠い結果になっていますが、ともかく、日本軍国主義に対抗する抗日運動を現実の正義の基盤にしていたことは否定できません。

一般論として、ミクロの部分で生命の尊厳・生命の神聖さを強調する SOL 倫理（Sanctity of Life Ethic）の立場では、殺人は当然否定されるべき事態ですが、唯一例外として「正当防衛」を挙げています¹³⁾。個人が暴漢に襲われたときになされる正当防衛をマクロの状況に敷衍して侵略に対する反撃の根拠（正義）とすることは賛同しやすい内容だと思いますが、同じ論理のカテゴリーに含まれる命題なのか、筆者にはまだそうだと断言できない部分もあります。一つには正当防衛は、政治の延長ではないからです（もちろん、中国の抗日戦争が間違っていたなどと主張する意図は全くありません）。

筆者の立場は、ガンジー主義者ではないが、アヒンサーに惹かれる部分が強いからです。政治の延長として開始される戦争は、結果として大量殺戮を行うだけでなく、産業や経済や社会機構、具体的な家々、個々の人間の諸関係、兵士のみならず市民の健康状態などをトータルに破壊するものだからです（その意味でも、日本国憲法の第9条は、第2次世界大戦の経験を総括した最良の帰結の一つであることは言を俟ちません。仮にそこに、連合国側による日本の完全武装解除を目指したという政治的目的が含まれているものだとしても）。いずれにしても、隠謀学的には、戦争における「正義」というものは戦争を仕掛ける側の大義（トリック）ということであり、その戦争の結果、毛澤東が矛盾論の中で指摘するように、新たな段階の出現となり、それがまた戦争の要因となるという危険性は否めないのです。

（4） おわりに～小田実のメッセージ

最後に、懸案の人道介入という正義について、長文の引用ですが、それに疑義を持つ小田実の見解をみておきましょう¹⁴⁾。今回の隠謀学が検討した「正義と戦争」の言明の問題点は以下に尽くされていると思うからです。

「私は今、「戦争に正義はあるか」を主題にしたテレビ番組制作にかかわっている（放映は2000年8月14日、NHK衛星）。そのために、最近、アメリカ合州国を2度、ドイツを1度訪れて、二つの戦争について、いろんな人の意見をきいた。ベトナム戦争についてはアメリカ人、「空爆」についてはアメリカ人、ドイツ人双方だが、ことにドイツ人。

「ベトナム戦争については、すでにもう明確にアメリカ人の意見は定まってきているように見えた。あの戦争はまちがっている、すべき戦争でなかった——このことばにつきる。意見を口にしない人もいた。たとえば、まさに戦争末日、1975年4月29日のかつて旧サイ

ゴンのアメリカ大使館屋上からのアメリカ人と協力者のベトナム人の救出作戦に空母からのヘリコプターのパイロットとして5時間、初陣の戦いとして参加した、現在は「海兵隊大学」の学長はどう尋ねてみても、発言を拒否した。その作戦に大使館屋上にいて彼らを送り出す側として参加した海兵隊の現場指揮官の元海兵隊士官は歴戦17年の戦士だったが、いまは一切の戦争を否定する「平和主義者」に変わっていた。

「ユーゴスラビアへの「空爆」については、もう1年前のように派手にその必要性、そして勝利を論じたがる人は少なくなっているように見えた。アメリカにおいても、ドイツにおいてもだ。まず「空爆」にかかわってのウソ、マヤカシがこの1年のあいだに大いにバレてしまったことがあった。たとえば、「空爆」実行に際してさかんに取り沙汰された「民族浄化」についてだが、それはあまりにも誇張された情報であったことが暴露された。難民も「空爆」開始後に多くなったことが判った。そして、虐殺にしても難民にしても、それらを誇大宣伝した広告会社の存在、活動も明らかになった。あるいは、ユーゴスラビアで民間人が少なく見つもって1500人が殺されたのにNATO軍の死者はゼロ。いったいこれはなんだ！

「そしてこれがもっと肝心な問題だが、いったい「空爆」は効果があったのか。「空爆」によって民族紛争は収まったのか。平和は来たのか。残念ながら、答は大きく「否」だ。アルバニア人が殺される代わりに、今度はセルビア人がやられ、ロマ人(〈差別語〉を使って言えば、「ジプシー」のことだ)が殺される。追い出される。

『「空爆」自体はアメリカ合州国空軍が中心となって行われたものだが、「空爆」のいわばイデオロギイ的旗振り役を演じたのは、「社民」「みどり」連合政権ができたばかりのドイツだった。ベルリンで、私は両党の「空爆」賛成、反対双方の有力議員何人かに会った。面白かったのは、元気がよかったのは反対派の議員たちであったことだ。反対したのが、今や正しいことが事実によって立証された—と彼らは異口同音に言った。賛成派は元気がなかった。いろんなことをおっしゃったが、事態の不本意な展開に押されて誰もが弁解的であり、ことばに確信がなかった。政治家のことばに確信をあたえるのは現実の事態、事実の裏づけだが、裏づけは十分ではなかった。

「ベルリン滞在の最後の日、私はコンピューターの「ソフト」の創始者として知られる老科学者に会った。ベルリン生まれの彼はユダヤ人で、1935年にアメリカに逃れ、アメリカで育ち、第二次大戦にはアメリカ兵として参加し、あと紆余曲折あって「MIT」の教授になったユダヤ人の苦難の歴史を地で行ったような人物だが、彼は「空爆」にはいかなる理由をつけようが反対だ、誰にとっても本当の敵は戦争だ、と言った。」

すなわち、戦争こそが本当の敵なのです。

[注]

- 1) B・プレヒト,『プレヒトの詩』(長谷川四郎, 他訳) 河出書房新社, 1972 年 302 頁より一部改編
- 2) 村岡 潔,《隠謀学入門》佛教大学社会福祉学部論集第 9 号, 137-146 頁, 2013 年
《隠謀学入門》Ⅱ 佛教大学社会福祉学部論集第 10 号, 67-73 頁, 2014 年。
なお,「隠謀学 plottology」は筆者の造語であり, この世の日常茶飯事に満ち溢れている数々の
隠謀(プロット)を解説するための一種の論理学・行動科学・文化的解剖学(アナトミー)でも
あります。「金儲けの話」「健康食品」などよく見かける CM もどこかに必ず隠謀の可能性を秘
めています。隠謀学は, それらの罫を見抜き, ナイーブな生き方に決別し, より強く生きるため
のものですが, 隠謀学は決して, それを「悪用」して先制的に他者に危害を加えるためものでは
ありません。
- 3) Peter K. McInerney, George W. Rainbolt, "Ethics", Harper Collins Publishers, Inc., N. Y., pp. 10-19,
1994
- 4) 高田佳人『英語で話す「仏教」Q&A』(JM・バーダマン訳), 講談社バイリンガルブックス,
46-53 頁, 1997 年
- 5) やすいゆたか「『山川草木悉皆成仏』と梅原猛」:「山川草木悉有仏性」や「山川草木悉皆成仏」と
いう言葉があります。これらの言葉は, 天台本覚思想を再評価し, 草木や山川も含めて仏性を持
ち, 成仏するとして尊重しようということ, 仏教的な環境思想として 1970 年代からさかんに使
われるようになったらしいのです。
(<http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/tokimeki/23sansensoumoku.htm>, アクセス日 2014
年 10 月 20 日)
- 6) カール・ベッカー, 佛教大学ビハーラ研究会におけるパーソナルコミュニケーション, 2005 年 2 月
- 7) 鶴田 静『ベジタリアンの世界 肉食を超えた人々』人文書院, 196-219 頁, 1997 年
- 8) ピーター・シンガー『実践の倫理』(山ノ内友三郎・塚崎智監訳) 昭和堂, 120-145 頁, 1991 年
- 9) 「ハノーヴァーの吸血鬼」と知られたフリッツ・ハーマンは 1920 年代に何十人もの人間を殺害し
たが, その後, 被害者の体をさばいてステーキやソーセージとして店で売っていました。長い間,
世間ではハーマンの店は, 当時手に入れにくかった新鮮な肉を提供する店として好評を博してい
たということです。沢登佳人, 他『性倒錯の世界〈異常性犯罪の研究〉』荒地出版社 130-131 頁,
1968 年
- 10) 和田クリニック「プラセンタ注射」(<http://www.wada-clinic.com/placenta.html>, アクセス日
2014 年 10 月 15 日)
- 11) 毛沢東『毛沢東語録』(竹内実訳), 平凡社, 83-89 頁, 1995 年
- 12) Kv・クラウゼヴィッツ『戦争論』〈上〉(篠田英雄訳) 岩波文庫, 1 頁-120 頁, 1968 年
- 13) SOL 倫理は QOL 倫理と違って生命保護・不殺生をうたっている倫理思想。
- 14) 小田実『正義の戦争はあるか』(小田実対論の旅)
「作家・小田実のホームページ」<http://www.odamakoto.com/jp/Seirai/000725.shtml> 2000 年 7
月 25 日号

(本稿は, 2014 年度佛教大学個人研究費による研究成果の一部です。)

(むらおか きよし 社会福祉学科)
(2014 年 10 月 31 日受理)